

四佛知見の本文想定

荊 谷 定 彦

法華經方便品に古來、諸佛出世の本懷を明かすと云われる文がある。即ち世尊が「妙法は論理を超え、論理の範圍を超えたものであり、佛のみ知ることの出来るものである」と説かれ、なぜなら「如來は唯一の目的のために、世に出現するからである」と云うこの唯一の目的を明らかにする文がそれであり、現行梵本では次のような五項目から成る。

- tahāgata-jhāna-darsana-samadāpana-hetu-nimittam sattva-nān tathāgato' rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate [1]
- tathāgata-jhāna-darsana-samīdarsana- 以下上記に同じ……[2]
- tahāgata-jhāna-darsana-avatāraṇa ……………[3]
- tahāgata-jhāna-darsana-pratibodhana ……………[4]
- tathāgata-jhāna-darsana-mārga-avatāraṇa ……………[5]

次にこれに似た文が續きその後全同の文が四回、合せて六回繰返される。さてこの五項目から成る文をどのように理解すべきであろうか。「1」は一應別にして、後の四項目は如來の知見を衆生に示し saṃdarsana、それに入れる avatāraṇa、

即ち意味を理解させ、それを覺らしめ pratibodhana、その道(實踐)に入れる mārga-avatāraṇa という一連の順序次第を追つて説かれたものとしてよく理解される。これに對して「1」の samadāpana は「つかませる、鼓舞する、教唆する、教化する」という意味で、このままの形では「示す」以下の一連の項目の初めに位置するものとしては相應しくないように思われる。普通よく定型句として用いられるものに、—— saṃdarsāyati samadāpayati samuttejyati saṃpraharṣayati (示教利喜) という一連の語句があるが、これに對しても當該の「1」と「2」とでは順序が逆になっているので、現行梵本のままでは「1」の項目の理解は困難であり、何かそこに後代、寫誤等による改竄が行われ原型が失なわれたのではないかという疑念が生ずるのである。

羅什譯「妙法華」に於ては、梵本の初回、第二回及び第五回目に相當する文が見出される。まず初回は次のようである。諸佛世尊欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛知見

故出現於世。欲令衆生悟佛知見故出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。

この佛知見の開示悟入が所謂四佛知見であるが、これについて、「示」は梵本〔2〕の *sandarsana* に當り、「悟」は〔4〕の *pratibodhana*、「入佛知見道」は〔5〕の *marga-avatahana* に相當するから、全體的に見てこの所は、羅什依用の原本に於ても恐らく現行梵本のそれと大差なかつたものと考えられる。問題は開佛知見使得清淨故である。一見、原本の相違と思われようが恐らくそうではなくて、現行梵本の〔1〕の譯文であろう。ただここで *samadāpana* を、羅什が多くの場合そうしているように「教化」と譯しなかつたのは、そうすれば次下の「示」に對して相應しくなく、工合が悪いと考えたからであり、恐らく譯出に當つて参照していたであろう「正法華」に於てこの *samadāpana* が「開化」と譯されていることから、次の「示」にうまく連續していく「開」という語を使用したのである。しかし羅什が法華經で *samadāpana* を「開」と譯したのはこの他には全くないのであつて、何としてもこれでは *samadāpana* の譯として心もとなく感じ、使得清淨故という句を附加したのだと考えられる。ここに現行の〔1〕の譯出に當つての羅什の苦心の程が窺われるが、しかしこの〔1〕を羅什もそのまま素直に譯出することが出来なかつたことは、一層この〔1〕の現行

の形に疑念を懐かせるものである。次に第二回目は次のようである。

諸佛如來但教化菩薩諸有所作常爲一事。唯以佛之知見示悟衆生。この初めの教化菩薩は、羅什の増補と考えられて來たが、眞田、清田兩教授はペテロフスキー本の研究に於て、「但教化菩薩の原文」として「Nに *tathāgata-jñāna-darsana-samādāpaka evāham Śāriputra* とあるが、之では（妙）にも相應せず（正）の『教諸菩薩』とも適合しない。併しPには *bodhisattva-samadāpaka* とあつて、正しく漢譯の通りである。いわゆる會通を試みる必要は少しもなく、直譯と考えてよい」と云われている。これによつて、羅什依用の原本に於てこの個處の〔1〕は正しく疑念を懐いた如く現行梵本とは異なり、*bodhisattva-samadāpaka* とあつたことは確實であり、それ故ここでは、先に現行梵本の〔1〕の譯と考えた開佛知見の句がなく、次の〔2〕からに當る「示悟」が續いているのである。次に第五回目に相當する所では、

是諸佛但教化菩薩。欲以佛之知見示衆生故。欲以佛之知見悟衆生故。欲令衆生入佛之知見道故。

とあり、ここでも先の所と同様、初めに教化菩薩とあり、次に示、悟、入と續いて、明らかにその依用原本の〔1〕は *bodhisattva-samadāpana* であつたと推定される。以上、羅什依用の原本では初回は現行梵本と同様になつていたが、し

かし第二回以後は全て〔1〕は bodhisattva-samādāpana と
いう形であつたと想定される。

次に法護譯「正法華」を見るに、初回は次のようである。
以用衆生望果應勸助比類出現千世。黎元望想希求佛慧出現千
世。蒸庶望想如來寶決出現千世。以如來慧覺群生想出現千世。示
寤民庶八正由路使除望想出現千世⁽¹⁾

この文は非常に難解であるが、衆生、黎元、蒸庶、群生、
民庶は梵本の *sattvānam*、佛慧、如來寶、如來慧は *tatha-*
gata-jñāna-darśana 八正由路は〔5〕の *tathagata-jñāna-*
darśana-marga の譯であり、望想(果)、想等は妄想の意味
であり、恐らく梵本にある *hetu-nimitam* を誤譯したもの
であろう。更に「勸助」は梵本の〔1〕 *saṃādāpana* 「覺」
は〔4〕の *pratibodhana* に相當するから、法護依用の原本
も全體としては現行梵本と大差なかつたと云えよう。しかし
見逃がすことの出来ない相違點は、正法華の初めの一句には
tathagata-jñāna-darśana に相當する語がないことである。
これを以て直ちにその原本には無かつたとすることは速断に
過ぎるかもしれないが、しかしすでにこの梵本の〔1〕の現
行の形には疑念がもたれている以上、この譯によつて法護依
用原本では、〔1〕は、*tathagata-jñāna-darśana* がなく代り
に「此類」とある故、少くとも *sattva-samādāpana* とあつ
たのではないかと推測しえよう。次に梵本第二回目に相當す

る個處では

教諸菩薩。現眞諦慧⁽¹⁾

となつてゐる。現眞諦慧は梵本〔2〕に相當する故、こゝでも
その原本の〔1〕は *bodhisattva-samādāpaka* であつたと考
えられよう。これは初回の所で想定した *sattva-samādāpana*
と合致するものである。この後の繰返しに對しては

十方世界諸佛世尊去來現在亦復如是

としてゐることが全く殘念なのであるが、しかし乍ら以上か
ら法護依用の原本でも〔1〕は全つてにわたつて *bodhisattva-*
saṃādāpana とあつたと想定される。

次にこの部分を有する唯一の異本であるベテロフスキー本
を全體にわたつて見たが、六回の繰返しの中で、當該の〔1〕
の形はすでに指摘された所を除いて、全く現行梵本と同じで
ある。その上、全體にわたつて寫誤や増補と見られるものが
多く、混亂してゐる。しかし、その中にあつて一個所だけ
bodhisattva-samādāpaka となつてゐることは、かえつてそ
こに本來の原型を窺ふことが出来る。

かくして、佛出世の本懷を明かす文の〔1〕は現行梵本のそ
れより、羅什や法護依用の原本に窺われる *bodhisattva-samā-*
dāpana-hetu-nimitam tathagato *rhan samyak sambuddho*
loka utpadate の方が本來の形として相應しいものと考えら
れる。そしてそれが後代、後に續く四項目の形に同化されて

現行梵本のようになつたと考えられよう。佛が世に出現する唯一の目的とは「ぼ、ぎ、つ」を教化すること *bodhisattva-samadāpana* のため、如来、尊敬されるべき人、正しく覺つた人は世に出現するのだ」と明らかにし、この「ぼ、ぎ、つ、教化」を次第に四つに開いて「生きとし生けるもの *sattva*nam に佛知見を示し *saṅkarsāna*、佛知見の意味を理解せしめ *avatāraṇa*、佛知見を覺らしめ *pratibodhana*、そして佛知見の道に入れる *mārga-avatāraṇa* ことのため如来は世に出現したので」と述べていると考えられる。この後、方便品の長行の終り近くに「さて聲聞、阿羅漢、獨覺があつて、如来の佛乘に於て教化する *buddhayāna-samadāpana* なるこの所行を聞か *śrīyuvanti*、す、理解せ *avatāraṇti*、す、覺の *avabodhyanti* ないならば、彼らは如来の（眞の）聲聞、阿羅漢、獨覺ではないと知るべきである」という文があるが、この *śrīyuvanti* は、佛の側から云えば *saṅkarsāyati*（示す）と *śrīyuvanti*、これら *śrīyuvanti* *avatāraṇti* *avabodhyanti* の一連の語句は、當該の *saṅkarsāna* *avatāraṇa* *pratibodhana* 等と同じものと考えてよいであらう。そうするとこのそれら一連の語に對する *samadāpana* の使用から推しても、佛出世の本懐の文の *samadāpana* は、決してその後の一連の語と並列的に考えられるものではないと云えよう。

生きとし生けるもの——ありとあらゆる一切の人々に、佛

四佛知見の本文想定(苾 谷)

知見を示し乃至道に入れることを指して「ぼ、ぎ、つ」を教化すること」と云うこの「ぼ、ぎ、つ」について深く考究されねばならないが、少くともそれは、小乘（聲聞、獨覺）と大乘（菩薩）の對立という相待の場を超えて、三乘肯定という絶對の場に立つ一佛乘に於ける「ぼ、ぎ、つ」であると云えよう。かく考える時、法華經自らが標榜する「大方等 *mahāvaiṣṭya* にして、ぼ、ぎ、つの教誡、一切諸佛の把握たる經」という意味がよく理解されるであらう。

- 1 K・N本四〇頁、三〇八行目、2 K・N本四〇頁、一一〇一三行目 3 B.H.S.D.p.568 4 大正Ⅹ、七頁上、5 [3] に當る譯がないが [5] と同じと考えて省略したのであらう。
- 6 大正Ⅹ、六四頁下 7 大正Ⅹ、七頁上、中、8 參照布施
- 浩岳著法華經精神史一五頁。9 西城文化研究第四、一三四頁
- 10 大正Ⅹ、七頁中、11 大正Ⅹ、六九頁下 12 梵本 *nimitam saṅjñin* (NK.本 p.57.17) を「起於妄想」(大正Ⅹ七二頁下) と譯している。13 快樂のために (*paribhoga-nimitam* K.N本 p.77.14) を妄想財業(大正Ⅹ、七五頁下)と譯している。14 大正Ⅹ、六九頁下、15 龍大真田教授の御好意による。16 K・N本四三頁八〇行目 17 K・N本二二頁六行目